

アメリカのバブル経済が崩壊して、世界の経済や流通が大混乱しています。私はこの問題を「流通と S C ・私の視点 975・986」で取り上げました。今回は、流通への影響という視点から、販売革新の 2008 年 11 月号・12 月号で、システムズリサーチ・チーフコンサルタントの吉田繁治氏が緊急寄稿で、さらに詳細かつ客観的に説明しておられましたので、それを参考に説明します。

(1) アメリカの負債総額

アメリカの負債総額は、5,000 兆円(1 ドル=100 円換算)で、内訳は、世帯負債が 1,500 兆円(うち 1,200 兆円が住宅ローン、残り 300 兆円がホームエクイティローン及び、消費者ローン)、企業負債 2,500 兆円、政府負債が 1,000 兆円です。このうち、資金を海外に依存した対外負債が 40%の 2,000 兆円で、かつ、610 兆円(31%)が日本から貸し付けられています。アメリカは対外資産を 1,650 兆円(07 年来)に持っており、すでに 100 兆円分が対外資産から 08 年にアメリカ系金融機関とヘッジファンドが資金繰りのために海外の株・証券を売りました。その結果、世界の株価が 50%落下し、時価総額が 2 ヶ月間で 2,500 兆円以上失われました。07 年度現在で、アメリカの対外負債は 2,000 兆円に対し、対外資産は 1,650 兆円なので、実質対外負債は 350 兆円です。

(2) 国債発行と中央銀行の紙幣の印刷による金融機関の救済

金融機関を救済し、金融崩壊を避けるため、今までアメリカで 200 兆円、欧州で 100 兆~150 兆円の規模の資金を中央銀行は投入しています。

米国は、09 年は 250 兆~300 兆円が金融機関の救済のために必要となり、政府は国債を発行し、F R B(中央銀行)は、紙幣を発行することになります。このような資金の裏付けのない紙幣の発行はインフレを招きます。

(3) 1 ドル/60 円、1 ユーロ/80 円の時代

ドルやユーロの大量発行は、ドルとユーロの価値の相対的下落、円の相対的向上になります。1~2 年前の 1 ドル/120 円、1 ユーロ/160 円が、2010 年頃には半分の 1 ドル/60 円、1 ユーロ/80 円程度になる可能性が高くなります。

(4) 超円高とデフレ時代

ドル及びユーロの価値が半減する円高現象は、日本の国富が増大し、1,504 兆円の個人金融資産の相対価値が上がります。日本の輸入物価は現状の半分となり、これは日本の物価を下げ、店頭では大規模で深いディスカウントが始まることを意味します。2009 年・2010 年・2011 年はデフレの時代の可能性が強くなります。

(5) 2012 年からインフレの時代

アメリカ・ヨーロッパ・日本の中央銀行によって発行された紙幣が要因となるインフレが、2011 年の後半から起こる可能性があります。今後 3 年はデフレ、2012 年からはインフレの可能性が高い経済となります。

いずれにしても、日米欧の経済は 2009 年に向かい相当な不況を覚悟せねばなりません。

(6) 戦後 2 度目の価値革命の時代

日本は 1991 年のバブル経済の崩壊により、1,000 兆円の土地の価値を失いました(アメリカの 2001 年の I T バブルの崩壊も時価総額 1,000 兆円を失いました)。日本の 1991~2000 年までの約 10 年間はデフレ経済でした。2001 年以降に日本経済は成長路線に乗りましたが、名目成長ではなく、物価を考慮した実質経済の成長でした。私は、日本の 1992~1996 年の 5 年間を「第 1 次価値革命」と呼び、2009~2011 年の 3 年間を「第 2 次価値革命」と呼んでいます(六車流:流通理論)。

第 1 次価値革命は、ユニクロに代表されるワンランク下のバリュー業態の出現です。安さと品質を兼ね備えた 1,500~3,000 円価格のバリュー業態は第 1 次デフレ時代(1991~2000 年)に大躍進しました。第 2 次価値革命は、ツーランク下の価格のバリュー業態の出現と、上質商品のワンランク下の価値革命です。今の上質商品は品質は良いが価格が高く、割高感があります。現在の品質を維持しつつ、価格的にワンランクあるいはツーランク下が、第 2 次価値革命(第 2 次デフレ時代)に大発展する商品や業態です。

(株)ダイナミックマーケティング社³
代 表 六 車 秀 之